（5）教育学研究科における高大連携の推進

高大連携

松本 郁哉, 桝井 光一郎, 光岡 歩美, 高田 水穂子, CHEN WENJUN

文部科学省により「高大連携」が位置付けられており，今後その在り方が検討されている。本研究では教育学研究科が高大連携を推進するにあたり，その課題等をアンケート調査，インタビュー調査によりその実態を明らかにした。提供する教育内容が大学レベルに適合したものかは検証の必要がある。高等学校の課題研究の指導実践により，課題研究では高等学校のニーズと大学教員の専門性が一致していることが重要であると考えた。高大連携関連行事への参加・調査により，これら行事の内容を把握することができた。岡山大学大学院教育学研究科が前向きで積極的な高大連携を進めていくことは，高校生一人一人の能力を伸ばすことにつながると考える。特に将来，学校教員を目指す学生が知っておくべきモデルケースと考えている。

Keywords：高等学校教育，課題研究，高校生との交流，アンケート調査，教員の意識

１．研究の背景

「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（以下，高大連携）」は文部科学省により位置付けられる。中高一貫教育や現行学習指導要領の実施などにより，高等学校の多様化と選択の幅が拡大している。その結果特定の分野で高い能力と強い意欲を持ち，大学レベルの教育研究に触れたいと希望する生徒の増加が見込まれている。こうした生徒の能力と意欲に応じた教育を実現するためには，「高等学校教育」と「大学教育」のいずれか一面のみから論ずるべきではないとされる。高等学校と大学は，それぞれ後期中等教育機関と高等教育機関としての独自の目的や役割を考慮して今後の在り方が検討されるべきである[1]。

岡山大学大学院教育学研究科は，様々な高大連携に対応している。本研究の目的は，教育学研究科が高大連携を推進するにあたり，その課題等を明らかにすることである。我々は，①大学教員を対象にアンケート調査およびインタビュー調査，②高等学校の課題研究における指導実践，③高大連携関連行事への参加・調査を行った。

２．方法

2-1. アンケート調査

対象者は岡山大学大学院教育学研究科所属の教員である。質問項目は以下に示す 11 問である（表１）。2023 年 10 月 10 日から 12 月 31 日まで Google Form による調査を実施した。

表１アンケート調査の質問項目

No.	内容
1	所属
2	文科省の示す大学と高等学校の連携の推奨について、知っているか。
3	これまで高大連携に関わったことがあるか。
4	これまでの高大連携に関する具体的な活動内容を記述してください。（自由記述式）
5	業務過多の中、高大連携にどの程度関わりたいと考えているか。
6	大学院教育学研究科でも高等学校と連携するための取り組みである「PBL CROSS」の活動内容について知っていますか。
7	「PBL CROSS」に参加していますか。
8	学識者として高大連携についてどの程度意識していますか。また今後高大連携に携わるとしたらどのような活動が考えられますか。（自由記述）
9	業務過多の中、大学教員が高大連携を推進とするとすればどのようなことが必要だと思いますか。（自由記述）
10	高大連携を進めていく上で、大学教員のモチベーションとなるものは何ですか。またそれはどうすれば向上されると考えますか。（自由記述）
11	最後に、PBL の本研究について、その他ご意見等ありましたら記述をお願いします。（自由記述）

2-2. インタビュー調査

対象者は特に高大連携に関心を持つ教員である。質問項目の例は以下に示す４問である（表２）。

2-3. 高等学校の課題研究の指導実践

岡山県立 O 高等学校および広島県立 D 高等学校の課題研究に協力した。教育学研究科教員および大学院生は，実験および論文作成の指導を行った。また，岡山大学の実験設備を利用した。

2-4. 高大連携関連行事への参加・調査

表２インタビュー調査の質問項目の例

No.	内容
1	学識者として高大連携についてどの程度意識していますか。また、今後高大連携に携わるとしたらどのような活動が考えられますか。
2	業務過多の中、大学教員が高大連携を推進とするとすればどのようなことが必要だと思いますか。
3	高大連携を進めていく上で、大学教員のモチベーションとなるものは何ですか。またそれはどうすれば向上されると考えますか。
4	教科で高大連携をするとしたらどのような活動ができますか。

図１　本研究で参加した高大連携行事

「PBL CROSS の関連行事（図１a, b)」「第４回 BeLive 探究活動ブラッシュアップイベント（図１c)」「高校生探求フォーラム 2023（図１d)」に参加し，その内容を調査した。

３．結果

3-1. アンケート調査

質問項目 No.2,3,5~7 の結果を示す（図 2)。岡山大学大学院教育学研究科所属の教員 20 名より回答があり，回答者全員高大連携の推奨を既知であった。高大連携に関わる機会が非常に多い，割と多いという回答は 14 名（73%）であった（No. 2)。一方，ほとんど機会がないという回答はなかった（No. 3)。業務過多の中，高大連携に積極的に関わりたい，可能であれば関わりたいという回答は 16 名（84%）であった（No. 5)。

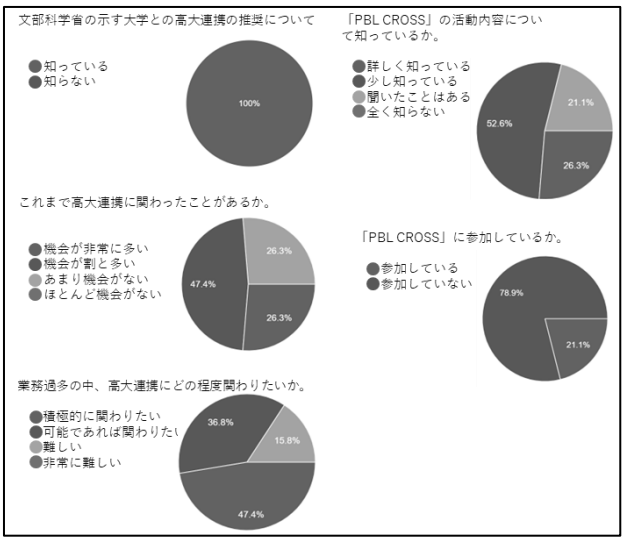

図２　質問項目 No. 2, 3, 5～7 の結果

活動内容では，出張講義および課題研究を含む探究活動の指導が多く，次いで，PBL関連行事の運営参加，SSHの運営指導，管理職研修，講演の回答があった（No. 4)。活動内容を分類すると，出張講義や学部案内などの入学者確保につながる大学紹介，大学レベルの教育機会の提供および現職の教員養成の３種類に分けられた。学校現場経験がある大学教員からは，高校側が感じる恩恵を記述する内容もあった（No. 8)。

高大連携の推進には，リーダーシップをとる大学教員の必要性，業務の優先順位の明確化，教員不足の解消などをはじめ，実施時期やオンラインの活用，また校費にまで触れられた回答があった（No. 9)。

大学教員のモチベーションという観点では，高校生を思う教育活動としての連携と，大学および研究の広報周知という活動としての回答があった（No.10)。

3-2. インタビュー調査

インタビュー調査の回答をまとめた。

【A 教員】推進にあたり，イベントは高校側と日程が合いにくいため，日常的に活動を行うことが理想である。高大連携から得られる学びを高校生にとって日常生活レベルで浸透させていく必要がある。専門性を活かした連携としては，美術の学びが日常的に生かされる，STEAM 教育が入りやすいと考えている。

【B 教員】高校生と何かやるのか楽しいと感じている。高大連携は概念が曖昧で，活動内容の評価基準がないため，それらを示してほしい。活動では大学

教員からの学部紹介や模擬授業，大学の施設案内，進路講演，探求の手伝いなどを考えている。大学の先生が高校の先生と関わるだけでなく，高校生と関わることが大切と考えている。また，１回行くだけでは子どもだけでなく,学校の状況がつかみづらい。継続的な関わりが重要だと考える。高校生は知識に対し思考力が追い付いていないと感じる。

【C 教員】高大連携は，高校生のためになるのが一番であり，教員のインセンティブはなくてもいいのではないか，と考えている。活動では課題研究の指導や公開講義，大学紹介などを行ってきた。だが，高校生や高校の先生が身構えてしまうため，壁を感じることが多い。伝わるものもうまく伝わらないと感じることがある。

【D 教員】大学教員のモチベーション向上のためには，高校生，大学生にとっても有意義で価値のある内容であればよいと考えている。

【E 教員】今後推進していくためには，高校ごとに申請するよりは，大学側が指定した日程に参加が可能な高校が複数集まる方法の方が良いのではないかと考えている。様々な高校が集まることで，高校生同士のつながりができ，新たな学びも生まれるのではと考えている。今も高校生にとって良い学びの場になればという思いで引き受けている。実際に高校生と関わり合うことで，大学生との違いに気づき，どのような高校生に入学してもらいたいかというイメージがもてると教員のモチベーションが向上すると考えている。

【F 教員】高大連携は，学問の奥の深さを分かってもらえるチャンス。また大学の学びは答えが一つではなく正解はないことを知ってほしいと考えている。モチベーションを上げていくには，大学教員の意識のもち方ではないか，と考えている。

3-3. 高等学校課題研究における指導実践

岡山県立 O 高等学校との連携では，これまでの課題研究の成果を論文としてまとめ，コンクールへの提出，さらなる研究発展に向けた活動についてサポートした。高校特有の学びも考慮し，より実現的な課題達成に至ることは，高校生の今後のキャリア形成にもつながる。一方で高等学校教員はコンクールでの評価が気になることや，研究を進めるための実際の実験手順などについては質問が多かった。研究に関わる時間が長く，基礎・応用研究に関する知識は大学教員の方が優位であり，活用するべきものである。

広島県立 D 高等学校との連携では，高校では対応が難しい実験（特殊な試薬等）を補助した。高校側で不足している器具を大学側から提供し実験を進めることは，高大連携に重要な貢献と思われる。大学に訪れた高校生は，実験設備や器具の充実さに大変興味を持っていた。

3-4. 高大連携関連行事への参加・調査

3-4-1. 学びの相談ビュッフェ（PBL CROSS 行事）

日時：2023 年 8 月 5 日（土）
会場：岡山大学教育学部　講義棟 5101 教室
主催：岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻
内容：探究活動を指導する上での意見交換会が開かれ，高等学校教員・教育関係者・企業・大学教員・大学院生でグループ活動を行った。高等学校教員の方の探究学習を進めていく上での問題を参加者それぞれの立場からアドバイスがあった。

3-4-2. 第４回 BeLive 探究活動ブラッシュアップイベント

日時：2023 年 11 月 18 日（土）
会場：ちゅうぎん岡山駅前
主催・運営：「BeLive」実行委員会
共催：一般社団法人　岡山経済同友会
内容：高校生が研究発表をし，立場の異なる参加者からアドバイスをもらう活動であった。

3-4-3. 高校生探求フォーラム　2023

日時：2023 年 12 月 26 日（火）
会場：岡山コンベンションセンター
主催：岡山県教育超高校教育課高校魅力化推進室
内容：高校生が課題研究発表，ポスターセッションを行った。高校教員向けの講演も行われていた。

４. 考察

今回の調査（アンケート・インタビュー）から，大学教員の高大連携への認知，活動への関与を確認した。高大連携について大学教員は様々な価値感をもっていることを知った。高大連携の内容は，大学の業務としてある仕事，個人的な高等学校との関わりからのもの，また自身の教育研究の一環やイベント行事などである。高大連携の推進には日常的・継続的意義ある活動の組み込み，具体的なガイドラインの整備，質の高い学びの提供，そして効果的なコミュニケーションが欠かせないことが示唆された。一方，高校生に提供する教育内容が大学レベルに到達したものかは検証の必要がある。なお，大学教員を対象としたこれら調査は，本研究科の実態および教員の意見を把握する有効な方法であると考えた。

高校の課題研究の指導実践により，高校の課題研究に貢献した。スーパーサイエンスハイスクール（SSH）などの先進的な事業による，大学等と連携した取組を実施することが文部科学省より示されている。高大連携では，高校のニーズと大学教員の専門性の一致が重要であると考えた。さらに大学教員自身の研究分野や専門性を活用した，幅広い分野での連携が行われている。高大連携関連行事への参加・調査により，これら行事の内容を把握することができた。高大連携の推進には，指導者（大学・高校教員）および高校生が目的に応じたイベントに参加することが必要である。大学として，現在実施されているイベントを活用することが重要であると考えた。

高校教員と大学教員のよりネットワークを広げていくための案としては，業務の負担超過にならないような配慮や高大連携を広くとらえた教員評価制度の明確化および高校と大学にある高く見えないハードルが低くなるような交流を進めていくことである。岡山大学大学院教育学研究科が前向きで積極的な高大連携を進めていくことは，高校生一人一人の能力を伸ばすことにつながると考える。

５. 今後の展望

今後地域への教育貢献において，県内の教育的な中心となる岡山大学の高大連携が重要となる。特に教育科学専攻では県内の高校教員と大学教員が連携して探究学習について学ぶ機会が設けられている。県教育委員会の協力もあり，高校・大学教員が積極的に参加できる体制を整えることで，独自の連携システムの確立につながるのではないか（図 3）。また将来学校教員を目指す学生が，現状の高大連携に参加することも重要となる。

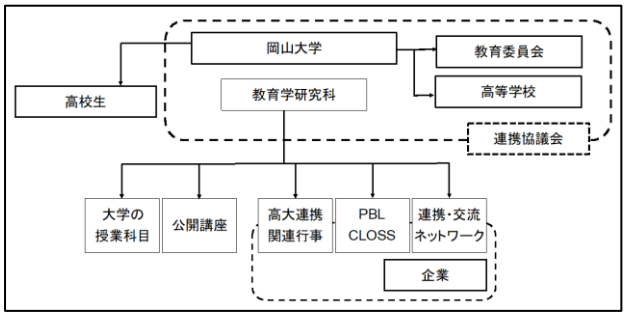

図 3　高大連携のルート案

〈参考文献〉

1) 文部科学省 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について．https://www.mext.go.jp/